

## 監修序

立場上、医療従事者の面接をする機会が多い。しかし、「私は〇〇ができます」という輩は疑ってかからざるを得ない。現代医療においては、一人の医療者のみで完遂できる医療行為などほとんどないからである。

チーム医療は耳に心地よい言葉ではあるが、そこにある本当の意味は、決して「皆で仲良く」ではない。自分の職分を切磋琢磨するのは当然として、全体を俯瞰し、他職種と議論し、時には自分の職分を超えて他職種に切磋琢磨を求める。そういった厳しい共同作業を通じて、多職種が共同しなければ実現し得ない高いレベルの医療行為を行うこと。これがチーム医療である。ひとつの職種に手拔かりがあれば、それは必ず全体を蝕み、高いレベルのチーム医療として昇華することを妨げる。くわえて、そのようなぎりぎりの挑戦をしようとすれば、我が出てくるのが人間の性でもあり、チーム医療には良好な信頼関係が不可欠である。かくの如く、チーム医療の実践は、決して容易な作業ではない。

本書の責任編集を担当した出雲雄大医師は、今や呼吸器内視鏡の達人であるが、その彼が、彼のチームのメンバーと共に、医師のためではなく、「医師・看護師・診療放射線技師のため」に「実践マニュアル」としてまとめた点が、本書の最大の特徴である。当院における池田茂人先生による呼吸内視鏡の黎明期から半世紀の時が流れたが、当院の呼吸器内視鏡チームが、再び、チーム医療という現代医療の形に姿を変えて、呼吸器内視鏡の書を世に放つことができるのは誠に喜ばしい。

数は力である。本書を通じ、全国に質の高い呼吸器内視鏡チームが続々と出現し、より多くの国民に役立つことを願ってやまない。

国立がん研究センター中央病院長  
荒井 保明